

点検、モニタリング方針

範囲	点検、モニタリング方針
○ 共通	・モニタリング期間は、リスク要因やそれに伴う懸念すべき事項を踏まえて検討する。 ・今後、新たに有用なモニタリング技術が実用化された際には、その活用を検討する。 ・今後劣化の進行状況を比較検証するためには、初期状態（現在の状態）を把握しておくことが肝要である。
1 新設管 (破損した下水道管の復旧区間)	・破損管復旧工事を終えた後も、地下水位の状態が落ち着くまでは、現在行っている地盤変位及び地下水位の測定を継続し、測定の結果によっては空洞調査の実施を検討する。 ・光ファイバー技術を用いてひずみ・振動を計測し、下水道管の異状、下水道管周辺の地盤の緩み、空洞形成を検知するセンシング技術を試験導入し、破損管復旧工事を終えた後も一定の期間測定を継続する。 ・チュウ4人孔及び新設管下流端部付近の割込み人孔を活用し、硫化水素濃度を測定するとともに、カメラ等による視覚的な点検を行い、状態を注視する。必要に応じて、ドローンを活用する。 ・点検の結果によっては、空洞調査の実施や境界部分の補修等を検討する。
2 新旧境界部 (新設管と既設管路の境界部)	・地下水位の状態が落ち着くまでは、地盤変位及び地下水位の測定を継続し、測定の結果によっては空洞調査の実施を検討する。 ・光ファイバー技術を用いてひずみ・振動を計測し、下水道管の異状、下水道管周辺の地盤の緩み、空洞形成を検知するセンシング技術を試験導入し、破損管復旧工事を終えた後も一定の期間測定を継続する。 ・必要に応じて今後の技術開発の動向も踏まえ、既設管や充填剤の状態を把握する手法を検討する。 ・点検の結果によっては、空洞調査の実施や境界部分の補修等を検討する。 ・接合部を重点点検箇所として、注意深く点検を実施する。チュウ4人孔及び新設管下流端部付近の割込み人孔を活用し、カメラ等による視覚的な点検を行い、状態を注視する。必要に応じてドローンを活用する。硫化水素濃度測定のほか、異常を事前に検知するための点検項目や調査方法を検討・実施し、維持管理を適切に実施する。
3 複線化区間 (チュウ6から中川水循環センターまで)	・既設の人孔を活用して硫化水素濃度を測定するとともに、カメラ等による視覚的な点検を行い、状態を注視する。必要に応じて、ドローンを活用し、点検の結果によっては、空洞調査の実施を検討する。 ・過去の点検で劣化を確認している箇所は重点的に点検を実施する。 ・点検の結果によっては、空洞調査の実施や補修等を検討する。 ・水位が高いことなどから点検が困難な箇所は状態を記録するとともに、その対応についても検討する。 ・複線化に合わせて複線化後の管渠の異常を検知するセンサーの設置を検討する。 ・必要に応じて今後の技術開発の動向も踏まえ、腐食の状況を詳細に把握するための触診技術、下水道管内の内径や部材の厚さを測定する技術の導入を検討する。 ・点検については、今後国から発出が予想される新しい基準に従うが、過去の点検調査により異常を確認している箇所や点検が困難な箇所は、それを待つことなく異常を把握するための先進的な取組を可能な範囲で模索する。
4 中川流域下水道全体	・既設の人孔を活用して硫化水素濃度を測定するとともに、カメラ等による視覚的な点検を行い、状態を注視する。必要に応じて、ドローンを活用し、点検の結果によっては、空洞調査の実施を検討する。 ・過去の点検で劣化を確認している箇所は重点的に点検を実施する。 ・点検の結果によっては、空洞調査の実施や補修等を検討する。 ・水位が高いことなどから点検が困難な箇所は状態を記録するとともに、その対応についても検討する。 ・必要に応じて今後の技術開発の動向も踏まえ、腐食の状況を詳細に把握するための触診技術、下水道管内の内径や部材の厚さを測定する技術の導入を検討する。 ・点検については、今後国から発出が予想される新しい基準に従うが、過去の点検調査により異常を確認している箇所や点検が困難な箇所は、それを待つことなく異常を把握するための先進的な取組を可能な範囲で模索する。